

Title	ダンバーグ, マクドウガル著 大熊一郎, 宇田川璋仁訳 マクロ経済学 : 国民所得の測定・理論および安定政策
Sub Title	
Author	松浦, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.6 (1966. 6) ,p.662(118)- 663(119)
JaLC DOI	10.14991/001.19660601-0119
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660601-0119">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660601-0119</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

湯村武人  
小島恒久 共著  
遠山 馨

『西洋経済史』

西洋経済史で何を講義したらいいか。私もその担当者の一人として随分これには悩まされ、いまだに解決がつかないでいる。産業革命以降の時期についてはどうやら私なりに格好がついたが、それ以前の時代となると、実際どうやっていいの見当もつかない。大家のものするところを広く読んでみたが、思うほどにならないのは残念であった。しかし最近では新人による概説書も出始め、かえってそこに私は苦境打解の手がかりを見出すことができた。本書もまた私を裨益すること大であった。内部矛盾の克服のなかで高次の発展が起り、その過程を追うことで結局は資本主義社会の理解に役立たせようという時、手法はいささか陳腐だが、講義で扱えればと思っていた問題を適切に拾上げ、簡潔にまとめて

めにはマクロ経済学についての良いガイドブックになり、また一応この分野の勉強がわかって専門の研究にすすむ人々にとってもこれまで学んだ成果の整理にやくだち、しかもその基礎の正確な把握にやくだつてであろう。このようにこの書を評価すると、この書があたかも概説書であるかのような感じをあたえるが、この書がただの概説書ではなく、この分野における新しい貢献と、マクロ経済学に関連して現実に生じている経済問題についての分析をおこなっている点で、高い学問水準をもっていることを評価しておかなければならない。

さて、内容をみると、大きく四つの部分に分けられる。第一の経済活動の測定においては、国民所得の構成がのべられており、国民所得を構成するときの基本的な考え方について、たとえばそこになにをふくめ、なにをふくめないかという問題、またどのようにそれを評価するかという問題が展開されている。つぎは第二部としての経済活動の水準である。ここではいわゆる国民所得分析、すなわち国民所得水準の決定メカニズムが解明され、貨幣理論と生産理論とのつながりがあき

新刊紹介

いる点、なかなか便利である。

第一章 封建社会の構造 1はじめに、一なぜ封建社会から始めるか、二概念の混乱 2荘園の構造、一古典荘園理論とその批判、二定住形態と耕地組織、三最近の成果 3荘園制と封建制、一封建制度とは何か、二荘園領主と封建領主 第二章 封建社会の変質とその諸要因 1商業と封建社会、一中世商業の性格、二商人ギルド 2十字軍とその影響、一十字軍の影響、二何が十字軍を起させるか 3農村と農民の諸変化、一封建領主と農民、二農民一揆、三地代形態の変化 4都市と手工業、一都市とその成立の条件、二手工業ギルドとその性格 第三章 資本の本源の蓄積 1資本主義的生産様式の成立 2絶対王政とその経済構造、一絶対王政とその経済構造、二商業革命、三農業における諸変革、四毛織物工業における生産様式 3市民革命とその課題、一王権と市民権の対立およびその帰結、二土地所有の変革と移動、三初期独占と国家財政、四貨幣および信用制度 4重商主義、一重商主義政策の展開 二新大陸貿易史、三東インド貿易史 第四章 資本主義社会の確立 1産業革命、一産業革命序説、二工業における技術的変革、三交通機関の発達、四農業革命、五後進諸国の産業革命 2産業資本の支配、一機械制大工業の確立、二企業形態と金融機関、三自由貿易の勝利、四労働運動の発展 第五章 帝国主義の時代 1帝国主義、一新しい段階への移行、二独占の形成、三金融資本の成立、四資本輸出と国際カルテル、五世界の

らかにされている。つづいて経済活動の成長と変動という第三の部分にはいり、経済学、つまり経済成長と景気循環の理論およびインフレーションの理論的説明がくわえられている。そして最後に第四部としての経済活動統制の諸問題において、これまで展開してきた理論のうえにたつて、実際に現実に生じている経済活動にかんする諸問題にどのような対処するかという政策について言及している。財政政策の問題、公債問題、インフレーション問題がそれであり、経済安定政策がいかにとられるべきかを興味深く示唆している。

われわれが経済活動水準の問題を経済学上重要な問題として認識し、その基礎となるべき理論を確立したのは、経済学発達の歴史からみると、ごく最近のことに属するが、最初はその理論の創唱者ケインズの理論についての解説というかたちでこの理論が示されてきた。そしてようやく最近にいたり、そのような解説とは全く独立した体系的なマクロ経済学の文献が世にでるようになったのである。このわずかな期間のあいだにも、この分野における理論の発達はいちじるしく、たとえば

分割と帝国主義戦争、2第一次大戦後の概況―結びにかえて、学習の採―参考書としてどんなものがあるか。以上が本書の構成である。目次を、いとわず並べてみた。何が盛り込まれているかは、内容として何が盛り込まれるべきかについて混沌としている段階で、何とも批判できない。一步譲ってそこに盛り込まれた内容だが、概説書としては妥当なものといっているのではなからうか。初学者向きである。しかし最近の諸成果を見落すことはない。ただ共著として執筆者の都合で記述が偏することになったのは残念であった。しかしそれも大して苦にならない。(法律文化社・一九六四年十月刊・なお翌十一月には二刷・A5・本文二〇一頁ほか・六五〇円)

―渡辺 國廣―

ダンバーク、マクドゥガル著  
大熊一郎、宇田川璋仁訳

『マクロ経済学―国民所得の測定・理論および安定政策』

この書はマクロ経済学を勉強するものにとつて必読の書である。これから学ぶ人々のた

消費支出にかんする理論、貨幣の理論などに関連して多くの新しい試みが企てられ、またそれらの試みが成功して、マクロ経済学の理論が大いに改善されてきている。この書はこのような最近の理論的成果を自己の体系的なかに積極的にくみいれることに努力している点で大きな特徴をもっているといつてよいであろう。ただ経済変動にかんする部分については読者に基礎知識をなじやすく解説している利点があるにせよ、いっそう深くこの分野に興味をもち研究したい人々にとつて十分であるとはいえないように思う。それはともかくとして、現在の水準においてマクロ経済学を勉強したい人々にとつて、この書が必読の書であることを強調しても少しもさしつかえないであろう。

(好学社・A5・三七二頁・一三〇〇円)

―松 浦 保―

\* \* \*